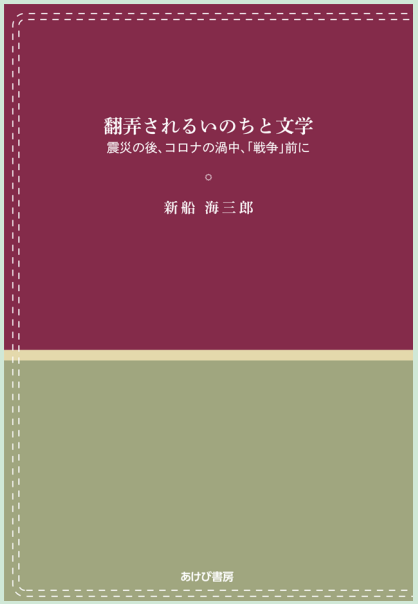
翻弄されるいのちと文学

震災の後、コロナの渦中、「戦争」前に

新船海三郎 著



●3・11東日本大震災と福島原発事故後を、新型コロナパンデミックに撹拌される差別意識を、「新しい戦前」のきな臭さを、文学作品に読み、それでいいのか、と問い返す文芸評論集。

たとえばそれは、かつて西条八十が「馬のションベン渡し船だからなぁ」と言って軍歌を作り続けたような、「しかたがない、しかたがない」という空気か。

翻弄されるいのちと文学だから、せめて「ろうそく一本の抵抗」（水上勉）を。

【目 次】

Ⅰ 三・一一と原発事故後の文学
三・一一から、三・一一へ
核エネルギー認識と三・一一後の文学
個をつなぎ、連帯を求めて
「私」から「私」を越えて
ろうそく一本の抵抗――水上勉と若狭原発
三・一一後に読む『こつなぎ物語』

Ⅱ パンデミックが撹拌する差別意識
「朝鮮」と呼べたとき
――小説『大阪環状線』の「在日韓国・朝鮮人」をめぐって
痼疾としての差別意識
パンデミックとシェイクスピア、あるいは石井四郎軍医中将
〝馬のションベン〟と軍歌までの距離
文学が障害者の「障壁」になるとき

Ⅲ 「新しい戦前」に「戦争」を読む
夏に読む大岡昇平
日中戦争と五味川純平
戦争加害をえがくということ
――洲之内徹とその小説の評価をめぐって
早乙女勝元と東京大空襲
大江健三郎と天皇（制）、また「戦後民主主義」
――「セヴンティーン」から「晩年様式集」まで
「平和」と「勝利」と「民主」という思想
――大江健三郎の二つのノートから
ドイツの「沈黙」、ニッポンの「沈黙」

あとがき

●不穏なのである。司馬遼太郎が言った「圧搾空気」が蔓延し、自由にものが言えないのである。異を唱えることに猛烈な「勇気」が要る。振り絞って思うところを言えば、出て行け、となる。コロナ禍で不寛容が社会的に認知された感もある。五味川純平が十二月八日に感じたものは今も生きて社会をつつみ、言わなかったおのれの不甲斐なさを一人で抱え込む。森友学園を巡る公文書改ざん問題で命を絶った赤木俊夫さんを明日のわが身に重ねる人は少なくない。黙っていろ、おとなしくしておれ……、そういういやな湿った空気が、闇夜の足音のように追いかけてくる。

世上はかくも無残で心も荒む。が、諦めはいつかの道につながる。歴史と文学の語るところは重い。「しかたがない、しかたがない／しかたがない／と、落ちてくる」流れを、断然、拒否し続け、小さくとも声をあげつづけようと思う。私はどこまでも私でありたい。そのような思いで本書をまとめた。（「あとがき」より）

●しんふね・かいさぶろう　文芸評論家
1947年北海道留萌生まれ。日本民主主義文学会会員。
著書に『歴史の道程と文学』『鞍馬天狗はどこへ行く―小説に読む幕末・維新』『不同調の音色 安岡章太郎私論』『藤沢周平が描いた幕末維新』『戦争は殺すことからはじまった―日本文学と戦争加害の諸相』、インタビュー集『わが文学の原風景　作家は語る』など。

●ISBN 978-4-87154-242-5　●お求めは、お近くの書店かあけび書房へ

●46判 並製 320頁
定価 2200円（税込）

あけび書房
〒167-0054　東京都杉並区松庵 3-39-13-103
Tel 03(5888)4142　FAX 03(5888)4448
info@akebishobo.com　https://akebisyobo.com

注 文 書

年　　月　　日

注文数　　冊

新船海三郎 著

翻弄されるいのちと文学

ISBN 978-4-87154-242-5
定価 2200円（税込）

キリトリ線

住所　〒

氏名

電話／メールアドレス

あけび書房
〒167-0054　東京都杉並区松庵 3-39-13-103
Tel 03(5888)4142　FAX 03(5888)4448
info@akebishobo.com　https://akebisyobo.com